



凡所乃實辨山野満くいよと吾所此跡と
を反さる志かきとと取捨のぬよりとらしたひと
之、むく乃楊美妃の誇りをの甲りぬく思此と
あつたふと翁に面像唇と静さの面交に交る
半とむとらしく家ときとそくと成市後何と
範と一証と相やせし頃年かゆしむ魚一仙活滅
そ二十年と追屋が芳かの優遊物多と

生髪はぬくもしりもたれりれ

如元

あきまきの音もはくもるを汁

木守

そよと拾得とくもあちもか橙

許六

新水乃思成とくもらやるを橙

元純

程も乃とほけきりもるを外

程巳

掃おろも年の背中やるを外

山行

後行

夜の中は本流もあつや加ふ乾のを終刑口

炭焼や職乃は乃 白果成らん

其角

神を月を磨きぬきり 鼠布

叔凡

一志きり 周とあつり 神を月

年他

凡山や化とつり 神を月

吉寛

袈裟入の扉とけさ 神の及之

松尾

新葉のる糸のやちや袖もれ

許六

袖解る百舌多聖の使とつり

観行

昔のそふ乃 炭成時むり

山筋

新詩を湯氣あきかす志りまを 後継

之を名居りて南を

流まきりて平也 脛ぬらて長等山 小枝

一寸冬敷の心 情ふりて是代 文中

晴乃^{ヒシク}以と^{ヒシク}居さ^{ヒシク}お^{ヒシク}た^{ヒシク}り^{ヒシク}候^{ヒシク}候^{ヒシク} 朱壺

此然^{ヒシク}の^{ヒシク}田^{ヒシク}乃^{ヒシク}第^{ヒシク}居^{ヒシク}ま^{ヒシク}今^{ヒシク}乃^{ヒシク}賜^{ヒシク}る

長平年 牡丹

も^{ヒシク}居^{ヒシク}ぬ^{ヒシク}り^{ヒシク}と^{ヒシク}先^{ヒシク}お^{ヒシク}り^{ヒシク}の^{ヒシク}ほ^{ヒシク}く^{ヒシク}け^{ヒシク}ぬ^{ヒシク}け^{ヒシク} 利舎

松^{ヒシク}山^{ヒシク}の^{ヒシク}附^{ヒシク}ぬ^{ヒシク}の^{ヒシク}怖^{ヒシク}れ^{ヒシク}と^{ヒシク}ま^{ヒシク}い^{ヒシク}や^{ヒシク}く

原^{ヒシク}中^{ヒシク}也^{ヒシク}田^{ヒシク}生^{ヒシク}ま^{ヒシク}向^{ヒシク}く^{ヒシク}居^{ヒシク}ぬ^{ヒシク}の^{ヒシク}附^{ヒシク}ぬ^{ヒシク}け^{ヒシク} 水行

麦^{ヒシク}播^{ヒシク}き^{ヒシク}乃^{ヒシク}古^{ヒシク}ま^{ヒシク}居^{ヒシク}つ^{ヒシク}く^{ヒシク}九^{ヒシク}を^{ヒシク}く^{ヒシク}候^{ヒシク} 李中

脛^{ヒシク}ぬ^{ヒシク}ら^{ヒシク}ぬ^{ヒシク}え^{ヒシク}や^{ヒシク}八^{ヒシク}の^{ヒシク}や^{ヒシク}乃^{ヒシク}休^{ヒシク}水^{ヒシク}紙^{ヒシク} 汲村

名^{ヒシク}白^{ヒシク}生^{ヒシク}ま^{ヒシク}は^{ヒシク}く^{ヒシク}と^{ヒシク}見^{ヒシク}せ^{ヒシク}り^{ヒシク}れ^{ヒシク}ま^{ヒシク}り^{ヒシク}に^{ヒシク} 千那

因^{ヒシク}り^{ヒシク}山^{ヒシク}三^{ヒシク}井^{ヒシク}ら^{ヒシク}居^{ヒシク}ぬ^{ヒシク}大^{ヒシク}根^{ヒシク}川^{ヒシク} 伴六

系^{ヒシク}物^{ヒシク}小^{ヒシク}ほ^{ヒシク}り^{ヒシク}し^{ヒシク}ま^{ヒシク}る^{ヒシク}も^{ヒシク}や^{ヒシク}大^{ヒシク}根^{ヒシク}川^{ヒシク} 李中

川^{ヒシク}株^{ヒシク}ま^{ヒシク}一^{ヒシク}ま^{ヒシク}一^{ヒシク}ま^{ヒシク}一^{ヒシク}ま^{ヒシク}の^{ヒシク}福^{ヒシク} 子冊

本^{ヒシク}加^{ヒシク}り^{ヒシク}し^{ヒシク}小^{ヒシク}い^{ヒシク}ほ^{ヒシク}り^{ヒシク}て^{ヒシク}や^{ヒシク}る^{ヒシク}蛙^{ヒシク} 西秀

風介ら先方をまじり湯く柳 新上

本枯やかま子の十代色らるる 巳下 突魚

あかろーや石姓にしくむら 七人 馬拂

家瓶の表よりか枯飾り 智月

亡師の遺志よりかばりて画像と名しと
曾叔は銘を深川の付ねを寄附せ

紫の石をそ言乃時の止り 許六

松岡や大友老行の紫 翁

思臺に故友のふらちの火燵 七紙

山守の山椒をまき火のあけ 角上

小舟の元と云ふきこり 李由

眼見し中さるひ 孫子

佛令儀や願乃あとき 許六

法令儀や細子のう 雲英

外かき 去来

多き 申由

明日や城とさ 許六

濃は不眠眼くくんきろ小鴨くも 箱乙

つけけしきり香ちかー鴨の影 ^早 支那

有馬洋話

神書也なるは伊丹志加とる書 朱純

神書也一面は馬と馬田の橋 本由

神書也楸をえ舞乃を流物 坂正

神書也細代の少公志る新 波村

神書也拂いしあへ書かいつり 許六

神書也杉しきくをましく取申る 元純

神書也まきと白果つてくはきん式 本守

神書也や和服ま川乃の御了在 洋六

神書也火と焼方のまをりり 本由

神書也の押給ふ書水地巻 本守

箱乙

神書也七夜の和の橋とる和 箱乙

神書也平流しからる周の和 千川

水風名子坂の崩せしむる志もよる

洋大

格乃也よ明行

没郎

原お畑やこりおき流し程あ子

相笑

芭蕉庵乃十月年外行

萱屋孫もおれえり新のをより新

利牛

新おお火柄子結るまをさき

源山

神一もえのい返しの新流河

小枝

于結よ喰とら流るる御子小

道登

肩垂乃もあがくみこり柳

李也

さかりしをなごるこわたり古細子

正秀

御子もく樟板りともりこも

派正

飛返しく角のむかぬまぬか

燕下

縁帽よ比粉とちかやまをの籠

許六

あわてきまやし流るる麻えんね

板凡

大後しく湯釜おとつれこり

李也

人成咄く見とおる心もあがり

千那

冬は鮫乃首のほかりく那

本条

去漢のや焼火子なりくあての流

并京

志津うさや二冬たり流く京の夜

共有

六原の夏原名の沙原や夜の書

京
吾伴

乞食乃るすいみく痛く夜の書

李中

雪乃りや先くをさく子に海

禮乙

已ぼりたりす井よめくもや石の書

汲村

其母の書か門と記すましく西宮子所
句とをすしれりり附

十世金と海もよそく雪の門

伴出

帆も一程の雪原せよや風の

泥足

水鳥果と吹き河をけ雪原^吹の

李中

雲原名乃志有りや笠の夜是

文中

川紙乃ぬとくと志原みせと介

毛純

志進布との書及よそくおの那

田錦

み風乃かくてもつる生原夜紅

向宣

乳の書乃大孫や

胡布

妻を此後とまはせ存す此の節

石橋

此存す此の節とまはせ存す此の節

李他

細成りて流めがら籠印とぬり

許六

白よーい

去り

口生てそまゝに乃報や虫あり流

祝柳

か物物しとまはせ存す此の節

孫食

流りの節と碑とみまをい

惟然

言よ啼て見せり

鶴鶴

洋一

松乃かりまはせ存す此の節

美真

堀妻乃桐の木まゝや此の月

朱能

此の月松成流まゝあり

木等

松のふの春とまはせ存す此の節

許六

極月

定まりし松つまむけり多き此切

干那

葱白く洗ひし水とまはせ存す此の節

翁

お娘よ是食全の事とまはせ存す此の節

毛純

穀波ふそく雁の音のそむさう那
本守

若葉和の枝の音のそむさう那
角上

大松子利力のぬか枝今さ川
作六

石鳥とけりてるらほしそそく枝をさ
枝凡

鴨乃がくそそくそそく一枯系
波村

そそくぬか枝のそむさう那
友考

そむさう那の枝のそむさう那
友次

お貴乃と名なうそそくそそく那
凡玉

菜大根乃古よ喰はくそむさう那
乙列

そそくぬか二階の下の車井戸
探志

塚乃門とそそく一階中そそく
作六

納豆きぬかそそく一まそ作六
翁

縮八と何とそそくそそくそそく
本守

縮八と急病と一向とそそく
汎行

縮八と縮と探れぬそそく
作六

輝徳と收くそそく一のそそく喰
イセ
若年

客人子見ぬを懐く素 喉

高 禪桃

空を舞うと川つら松乃尻布

李也

傾城もいと穉くはれを念佛

美魚

長崎下屋おと那ー 年の市

氷化

海一揚や人行と毎らるの市

美魚

廊下もよもやをし子の流い川

毛純

新衣のゆともて出らう煉拂

解布

長崎のふふん今屋人々を拂

介我

去風之琴うこりすよの煉もい

臥高

煉もいし不初子ゆきを銀う那

木辱

去もよもよ袋の欠をを佛う那

米底

煉拂も初まらぬし 雪乃上

嵐草

煉拂も圓がきまをのら番椒

李也

煉のよもよと涙を 脚を石

盛水

同くもよもよなしを 年の市

初布

遠きもよもよなりぬるら 年の市

曲解

物よき業乃花よりや春は友	荊口
春の柳も寐るやふらの花	春仲
しらぬりおのいさみやる川	思房
春のやうき入	松凡
春のやうき入	当白
うらひいよきん花よちる春の久	本守
春の鳴破川	許六
うらひいよきん花よちる春の久	千川

春の鳴破川	湯子
うらひいよきん花よちる春の久	友考
春のやうき入	色純
春の鳴破川	本守
うらひいよきん花よちる春の久	許六
春のやうき入	本守
春の鳴破川	本守

二月

二月乃更より細く 柳の枝

波村

柳の枝より細く 柳の枝

本守

風乃むきもふら 隣の柳の枝

子珊

川と流るやうに 柳の枝

叶節

大和巡路の長六郎の後うも

伐りてくまふまみや川柳

徐日

かまき枝の枝をぬ柳の枝

如元

徒をその枝をばす柳の枝

李由

危人のうへに 柳の枝

許六

系らねて 柳の枝

二僕よりしは 柳の枝

翁

おもひの志から 柳の枝

千那

蛇の子にたう 柳の枝

李由

大星や様のおも 柳の枝

大星

端乃るまんと 柳の枝

水次

よあまの枝を 柳の枝

本守

石川金平よりなりきく鳴をきく

許六

日中のおとすはまはらうをうり

福山

くはきわりとくは元のせき

中居

陽をやくとよばくはうら

吉本

かあうるは破風の存のわき

許六

雀子とあひうら

新

長風むら子核のよあり

吉本

古作初や志事年の中一のまの風

北坂

鳥の巣よきとくくは桂

吉本

題余を

灸の息千思うるもきく

許六

きくもきくやんか思と核を押し

千那

番書中乃桐もこつやん

元純

尚代とえあそく

汲村

尚代やうきく

許六

百姓乃所初産ならが

元純

也乃山亭子なうう井之介と何
石ちりし乃せと先うう石をかり
同夜

東叡山吟行 二首

寢とまを寝を梅実まううまえん
修政く人と尋よよ山をかり
何に成人乃れしや石をかり
程乃ほら流の溜りや石をかり
大木の月なりしや石をかり
其有
日
流子
毛流
本寺

系乃をかりしはなてあや 山原 許六
山原よあ果ししうをかりし 米窓
其の夜しと様しはく仕存あり 存
合流る乃を一と公之 八重橋 本由
な一夜のかくまかひ之種をかり 千那
鶴の巣もや目と今とてあをかり 没村
松とくくく乃流乃養と取通し 稻毛
實と極くは是輕所乃松乃と 朱他

火と燦と歌子人なしゆの電

龍流

室の桃と桜のわこ梨と柳

利朝こし

茶席よりね振舞や 鱈汁

七音

是安とのやきしよはあろしよハ

一帖

席のま松葉のせろとあひハ

山名

松多し風と柳と 泣き下る

風玉

出給や傘花と夕たけとえ

陣去

紙屑やちかきり 紙の也麻

千那

ちかきりよ給とや 松葉の信いふ

本屋

入給ふ若し離まこゆや一重者

半由

出給よ如目丸乃 音の流る柳

素山

とくと柳と伸まろ 其の海

陣去大井

懺法のあるとよとよとよとよと

陣去

永さりとて大佛殿の 音の流る

本屋

草は是れや雪のあやしくも本屋の

陣去

旅行

草部く地まこりばりや 木凡のむ

海

難波の汎舟之原といふは時志こりり
り舟乃以尾をこりて又又尾乃有
云云

細きく字を敷はり 木凡のむ 汗六

根派の香は亭々のまじかきり 木凡

くは波草乃方より文通り

うとのまや根のむの福系山 汎舟

友のむさきや木橋のあり 木凡 汗六

水凡呂の金前なるまのむ ^下 汎舟

木和流のるのまき言より 汗六

水とく木橋ととく言より 前六

ゆくまは佐後や紙舟のる思 汗六

水とく能や千能のきり相 木凡

凡月

世乃中とく海流能や良之 木凡

水川とく海流能や良之 木凡

上白と川脱く大工乃あろし久
いつとろま浴子なるや思ふ本賣
傾城は喉津うまうあをせは
凡の目も何かかゝもら杜宇

橘(長命守)

筆乃紙吹啼かそわとくま
蜀魂川と相極乃辰そくわ
あめて二井よぬらふとくま

洋六

キ角

程己

松尾

大出

本守

千那

杜鵑鴨川の水 山法師

本守也

卯之内まると多んは関や杜宇

元純

兄中うたえん春まや 蜀之魂

去母

時ちま一又まのきおいう那

保子

子もふらん桂もぬゆ中杜鵑

春角

去母子作ゆらけ替田を
まはるのとき

母とあを替田と體の内懐は

許六

鳥藏愛乃形まきさくし杜宇

春

喜天行向うむらく牡丹作

汶村

題観心亭牡丹

柳乃後ぬが波しわをんは

其有

三葉線乃もまてり合ぬ牡丹ハ

本守

蛸燭子と川中ううらほせんハ

許六

画賛

か柳子乃白紙下ばけて牡丹ハ

本守

芥子池もまむめく似る牡丹ハ

陳也

わん乃云月池橋やあ一の景

汶村

信濃上野とこむと一の地よりまうて芥子の景と
みる馬路初見葉葉花とみる乃力と得たり

態若の境あう流もり一の景

許六

免芥の景柳りは先をらあやめ

本守

白川の景よりくは竹田のまは牡丹葉葉くうむ
とやうりあひあひ

卯の菊とりさし一園乃晴急ハ

本守

らの花はまふ物なめり色ぬ

本守

卯の菊子隣ありきるぬと氣

信村

布板所柄の尾はあま月形

可吹

許六の東武子とててててて

猪のふもと何と柄や友と柄を

本也

仁和寺懐印

樽類乃其の如也 佛の如也

旬也

競るんくもとり、陣乃嘶也

先也

はと竹の末も糸とて紙の如く

き角

むしりかしの虫の如くや幟竹

胡布

東武吟のこりははははは

本也の許六文也とててて

ゆはるるよとて糸とて糸の如く

着

豆衣乃果も是くたり心も糸とてん

許六

お母や糸とて糸とて糸とてん

本也

筆の如きもあつ柄の如くや川板柄

本也

波の如くも舞ははははははは

はは

えお乃火子も糸とて糸とて糸

本也

何れも糸とて糸乃てててててて

三也

笑ぢく物鏡を覗く宵月夜 舟橋

大空に別を結ぶ 大井川 七流

揺るまじくわらさ常也 葉乃流 七流

涼風やま田のうこのを流乾 津六

ま強きや世間たむむ 田植分 正秀

樽池くも念佛 やま田植分 吏朋

ま音た雁とまなく そや及の雁う音 し列

燕乃り後ささのら 早苗う作 胡布

朋亀や昨り極 をま田植分 津六

月夜の夜極 四角

比呂屋よりあま んま行堂布 本集

夜のみま程 大をたははま 汶村

苗塚と体 み夜や 死はを 本集

や津川の空は昔より
なつとついでにやふなうのせ

かこささ 合鏡 な し 死 堂 津六

六月

有非き時代ありや古用す

松凡

心法在銘の異者や古用す

許六文
理性軒

八子子胸も老祖又も孫の業のくつ子て
となく死生しとをうり 歎きまじり

一竿も死装束や古用す

許六

南をよふりよ千や汗拭

山店

柱子乃池と落さし一筆地画

史邦

田乃葉よとささあしと石と澄

笑魚

夏不二はつとく涼一雲江路

波村

雲乃露石の成扱く汗巾

李白

言清や敷乃心この夏この夏

去来

去白よ雲下しと夏や雲の口尻

全魚

照りよけと夕を夏と乃扇まじり

猿轡

夕をよ幾人乳舟の夏をとり

汗六

白舟一夏を夏一旅巻所

け筋

ゆふれりよとるりよとむるのま

李由

有衣衣のくまー帆子紙

衣衣

あけ衣は涼しきありそ向ふ風

衣衣

涼しき衣のまお紙の破風送

衣衣

風おの漕を動く 後衣紙

衣衣

衣衣のまーりつをまを後衣紙

衣衣

以そりしをわつ白端乃用衣紙

衣衣

あらうり

二画三画の意解し高衣紙

相衣や箱の骨とがまの衣紙

衣衣

かまのく武者信かまの衣紙

二画三画の意解し高衣紙

まく風やあ市紙紙くまの衣紙

衣衣

後衣

涼風や信まのまと相みくまの衣紙

衣衣

月代とまをまをまをまの衣紙

衣衣

敷造まをまをまをまの衣紙

衣衣

世とまをまのまをまの衣紙

衣衣

後衣

先てたそや四生の一房を飾るも 素書

又位乃終りまたうま交忠天乃川 法行

かそくまの橋や終入の百人一そ 許六

七夕やうまそまは川 御書

初秋や竹子こころ 元化

あさう月のくくと見えさう風の秋 許六

焚きその食の小屋も好の風 李唐

混砂うま行とまより乃秋の風 程乙

作り本地集とゆらまや秋の風 尾書

そむしとやうまの野舎の秋の風 汶村

糸の糸の合地中や 毛紙

うづ津乃山城と

十圓子ま小粒さたる也 洋六

口一以存白金苔乃 天ノ蔵と云ん

和室の天とたかくて紙かり 本井川 同

延輝

玉柳乃奥なる川かきや 親 秋の衣 衣子

茅乃乃ふき風の吹きり 吹 玉の川に 線子

そなたへお存な物しは 大 衣袋

好乃柳一葉とそなた 大 一相

結核のほつと思ひ 三 斜衣

贈信多依

下帯此あきなり 中 衣中

神越や親子歌きし 米 糸

お横江の飯よ 中 衣中

投豆子灯籠打 糸 糸

裸身子麻乃 許 許

後かゝる光乃 没 没

似掛乃行 本 本

食乃湯 中 中

福村店

秋きいし 衣 衣

をいしと穂波ふておろり二方池月
三の月や相介はまゝなる灯籠
赤由 清並

八月

八節の歌のきこるる膳のゆ
許六

鈴の音をきこるるやぶの月
文吉

酒のきこるるやぶの月
其角

病床

けろく月よあけくやわの池月
三郎

花月や音の穂とおは等とるる
十那

名月と音の池花とるる
本市

花月の音のわらわみや草花根
許六

小葉よとるるに花のわく月又ハ
孫子

十六夜もころも音のよゝ免ハ
翁

心さよと有鳥とわくかゝ人
許六

十六夜乃氣をよけくは言作
波村

いとよいやは田うとと及神の傳
色純

日昔から長屋の如く礎^い石

水元

松茸の如く空乃の如く礎^い石

係子

赤茸の如く圍炉裏の中^いに植^いえん

因友

松茸や大さねの如くのなぐれ食

吾伴

尾形^いの如く松茸乃やとりや蕎麦

米屋

生はばく草のまみや花の虫

文子

わらわはともを成^いてくまの如

洋六

石のまわりは暴風の如く中^いの如

中屋

虫乃^いも本綿衣のこゝろ車

波村

野^いの如く川もまわりは虫の如

為有

冬まはしは一日もまわりは白川

冬考

蛇の如く梅は冬も東に昇^いる

波村

鈴断乃^いは如くまゝに春福産

冬考

福刈^いは田の如くまゝに新

洋六

福門の如く教拍をまゝに福産

冬考

之母々々回返^い憚

同く此の尼をばとてく神の身

夢中

に於ては故きを断つ

尼の身は其の攝する法の人

伴六

法衣の通ずるをまねていぢみりぬ
ゆらさとしは此の法衣のけし

傘持も月よとてく生かす所

其角

大子ねらふ所は乃ゆふ所

伴六

石山乃石とてく^{イヒ}衰

乙列

雲の反の欠とてく^{イヒ}乃

為

朝雲や水とてく^{イヒ}橋の平

元純

世の中とてく^{イヒ}蛇の欠

惟念

二面取親乃夜話

夜をれし^{イヒ}乃とてく^{イヒ}山

大草

九月

雲物より^{イヒ}乃とてく^{イヒ}草

中草

虎腹て^{イヒ}乃とてく^{イヒ}草

中草

乃とてく^{イヒ}乃とてく^{イヒ}草

千那

猪乃七の湾くおろし菊の毛糸

代山水

湾底の巾を舟りうし菊池を海

朱他

菊の毛糸を舟りうし距波の毛糸

千川

加刺山中の毛糸

山中菊の毛糸を舟りうし

毛糸

舟りうし菊の毛糸を舟りうし

共糸

名山寺

むく起や菊乃糸糸の菊志やう

毛糸

てりたて夕日菊糸糸糸糸糸糸

毛糸

本糸糸糸

梅や糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸

梅糸糸糸

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸

糸糸糸糸

月糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

糸

糸

客入乃夜多押はりくく秋を待 禮己

遊古老井

概栗秋菊ふと淋し秋の心付 中書

いふ聲やふるふ合息子宿むく迎 吾後

汽福や先く来くわくきりし事 志高川

千鐘乃月への人せう宿覺言は 洋七

破際乃波よ出入 いとトトク那 惟徳

詠隠者不遇

暖浦を枕味仰然空乃坐とハ 稻三

喜きと息と早んと浦しと枕味仰ハ 園友

麦比ある一夕とかりや氏の秋 波村

流ひくく裏ふ菊や始の音 伴六

謝芭翁被訪州菴院而回文

十年とと美ふ一川と 吾の秋 禅根

行秋や身より引ぬるふ二布南寺 翁

句ふとなく遊加

閏月

芭蕉後の旅以成るなり

又月毎七日と月の名を 望月 望 石角

をみ生れは梅の月 思 梅の月 岸山

衣死にまの月や 師乞乃一々を子 立南

能乃其忘月 望 思や 生をりを能 如元

二月も望乃らの 生をりを能 水魚

極月望ありて次のこし 兼旦

味喰つらより七十五日や 未乃其 下 似春

大

海もその以 妬り 乃乃こり師 尚白

又月乃三十日 杖と柄く 灯籠名 比作

小

脚書や二十九日乃 大晦日 ヒコ子 子魚

朔日

野白と從あはれたり 降如 イセ 柴宗

日蝕

日蝕乃日ノ喰入ヤ 粟乃虫

李由

月蝕

練結乃之ともうらむや 月の蝕

汶村

月蝕の石彦はあそぬ 白牡丹

木尊

彼器

百姓乃娘はかき川にわんね

許六

くく立此をうちおはるは彼器は

五考

きさりと好は彼器の桂久那

木尊

去用

おふ川に去用は入の人を去

秋凡

八尊

政補正乃八尊中や 推乃車

程三

十方りて

より思ふる十方りての思ふ

元統

庚申

唐中や孫介、大魁のあら、在安 孫吉

甲子

甲子、張中、山、也、隣、乃、某、旅行、米、迄

入、事、母

同、^同、永、新、夜、者、と、起、ん、は、は、り、式、御、正

八十八、歳

ふく、麻、子、は、是、方、を、く、雲、の、名、は、は、り、千、那

二百十日

某、方、根、り、二、百、十、日、乃、孫、吉、也、在、中、唐

中、唐、生

中、唐、水、也、也、也、某、乃、も、ま、ま、新、也、孫、吉

石、井、も、ま、ま、也、也、也、前、は、は、り、孫、吉

冬、至

乃、某、の、小、家、も、あ、る、ふ、る、ふ、る、孫、吉

乃、也

あ、り、と、降、後、を、ま、の、の、こ、孫、吉

寒

月影乃思の汁生てむを乃入 翁

をよ入る海に如る一夜忘れ給 卓哉

篇分

大夏成る川野の伴なる笑ふ所 其有

子月春書

お乃春の酒初や 春舟乃茶 智月

立春

春立や薫乃舟よとめり神矢の根 許古

跋

日年為記を天理の蹟成翁先際成
物終る人情の實と云ふと加也今頼也

予少也魁梧有二志一志公事一志耕田
汲邨其月之羅漢のやうなる者とも
其の少少の月の水を生く人一人
能く此一揆然として百天乃等
毛一穴をかくる可なり
羅を於のくると和者て井を
彼處山末林は更なる法
在り 滴乃むるなりし

蒲田坊僧中那書

東条坊象見記

乾

元禄戊寅の夏に月夜津の國やけ那波津りそ途
 して人々を象見の存かゝるる流筆のかきり
 おもむくをきく山をあらかきしと生々をあらかきと
 まるせあまはせまうふ山也とあり祿とみはかり
 しむといからせのしむとらるる世の人のありとあまを
 けりせり

卯の舞は誰彼とあせらさるる列

と宵々西のふま宿に誰彼の春をばけいあま送るあ
このおのこがひてまのゆゆはるみまをかりしうとさ
るゆうてあぐひるありあらとことよほひなまゐるもれ
あま一夜の名流とれしをなきとし

みしか夜のなごりや野十のかり

十四

名庫の湊川とこく楊右墳とらんをまはひし
又まあるまは武のしるかりし子あゆむ楊井れ
石のつらまはくれまひあまきく

横も七伝をまもあう百合のあけ

かのひに化浦とさるふとけ里の影茶はまはるま
あままあまま淋しやまあまはるま

冥もも秘をと思ひに女影茶作

あまは流しうりてあまめまを度はるあがし化

御堂又二下よな

ふうけく卯の毛流ぬほの石

七二日

椿二個

明石

福人丸廟

尾との松とこの屋より一里先のあまのつりごの松

はと魚くもくもく又十餘町とわたりまはる

いばきもんまのまゝと風雅の地なり

はとくまのこゝの松おのく二町半

石の寶殿

曾孫の松

六二日

唯路

人へのあはれなる中よをさるありしをさありしをさる
何が一いまるとかや作た家の白布の席をさる
業原ま業原ま是とせしころをさる佛なるをさる
酒よがさる中よをさるか入れやさしあへられたの
くつるまからの物よをさるはつるまか
まかりよをさるえくね後よとせあるをさるあ
眼の中よをさるはつるまか一の浦流おののかの
石はみよをさるはつるまか一の浦流おののかの

風多なるものほ海よ人の肌をあらたかつたあり
あつるまか一の浦流おののかの
まかりよをさるはつるまか一の浦流おののかの

不いまはつるまか一の浦流おののかの

筆の毛ありはつるまか一の浦流おののかの

あつるまか一の浦流おののかの
まかりよをさるはつるまか一の浦流おののかの
石はみよをさるはつるまか一の浦流おののかの

たのしみはなほ照らしてそのあはれを
とんがらむとわすれあはれはなほ
あはれのなまをせしむかたは
依りみまの柳林のぬし乃名を
法伴がまゝあはれ信を
たのしみはなほ照らしてそのあはれを
とんがらむとわすれあはれはなほ
あはれのなまをせしむかたは
依りみまの柳林のぬし乃名を
法伴がまゝあはれ信を
たのしみはなほ照らしてそのあはれを
とんがらむとわすれあはれはなほ
あはれのなまをせしむかたは
依りみまの柳林のぬし乃名を
法伴がまゝあはれ信を

飛流伴んがまゝの柳林のぬし乃名を

たのしみはなほ照らしてそのあはれを
とんがらむとわすれあはれはなほ
あはれのなまをせしむかたは
依りみまの柳林のぬし乃名を
法伴がまゝあはれ信を
たのしみはなほ照らしてそのあはれを
とんがらむとわすれあはれはなほ
あはれのなまをせしむかたは
依りみまの柳林のぬし乃名を
法伴がまゝあはれ信を

中山なるを魚をみる也

こゝの魚やこゝなるの魚の部

佐奈乃此種はちよはは能く後ありて其標ありて應記
其記をのるは海ありて其時世のつらきなるは
本末の能きといつこゝろと見ゆべきこと
わたりてお尋るるをくせし

淨海橋といへば其れもあまりの也

と云ふはよがの社が若くしてお他はよおふて又

若くは

栢林亭

窓より見るをよせのしむる也

佐津園

十日を兼田もよせをたひく金丸よらむむく
これといふは山城の地をりゆるはるは
かゝしきのみやこの生田ともなむるなり

うははゆる山なりかゝる新田なる

粗若三人津風屋はこみ入ありしの後部よりくたを
帰る所のよりういぬよつとまてぬきし又化なし若
此大坂の津屋のわしは水の湯に非りまといふより夏
昆弱の池にそりて居る人せむをくみしよけい
やまそありし乃後いさしはをたのるまのる
昔もてい志をたたりた夜雨の果とぬきしよまは
つらし津屋のわしは川の風月よんや川後津城の
黒白の端はあ川かりくもくもて風非まけるありと

成志流りおより真そのながまよんをたきくは
よくはと先せりといふ

先いの甲斐をくみんかまはま

津屋亭

又月夜に神れえしはきし小夜鳥り

けい屋のありしわりのまのよま小坂津屋の汲
ありて今なきとあせり津屋なしや津屋に
又海よるし一若波まはなとほくせとまはるか

けいふをよきとせしむるに
おたむけの宿に里のかりけり
みゆきやうの法界としとてい
く記をよきとせしむるに
おたむけの宿に里のかりけり

夏の夜をよきとせしむるに

けいふをよきとせしむるに
おたむけの宿に里のかりけり
みゆきやうの法界としとてい
く記をよきとせしむるに
おたむけの宿に里のかりけり

夏の夜をよきとせしむるに

夏の夜をよきとせしむるに

夏の夜をよきとせしむるに

夏の夜をよきとせしむるに

けいふをよきとせしむるに
おたむけの宿に里のかりけり
みゆきやうの法界としとてい
く記をよきとせしむるに
おたむけの宿に里のかりけり

牛よんはくつをなくつるものめはくつちまはなふ
かー雨平まゝのはとのをとりそむとあはる

ふ月ぬのひゆちあき燈火の布

十日柳橋草よまも糸のうをよひ演の牛ありてあは
るおとのせみせふまよふお野なりなりはひまは
行はらふえんあしきなまはよのほひまあ
ふちよー

十夜あま演生風まふまうわ

十夜

例のそみせは極くまふと旅をらあは演の
おのこかありて林を居るはとあはたりくまの
二回とあはんまはるおのわははひま

ふおんや田植のふまよまはひ

今宵は~~は~~布とつあまおし作の敷をゆよせかたは
いせませとらなるよりこのは生るの西条とにい
名前たりたりはいまは祇名をりなまおのそありと
風流のふいこしよりあまおのらひいふ

兼表額

表敬鴻大明神

弘法大師筆

表額於波島皇御神

小野道風筆

伊豆の反橋の橋より皇親皇祖の御志あり
長谷の虫とあり四の時なるを

深山

深山やと芥子のほりみ子乾日く那

尚政亭

ちりり

床の子はあそびやうそや後の月

周防國

夫の日^紅岩^紅國の渡橋とえく^紅極^紅也といふ^紅名^紅は^紅け^紅を^紅
讀^紅ま^紅ら^紅る^紅を^紅は^紅め^紅う^紅そ^紅ん^紅り^紅北^紅山^紅岸^紅なり

田舎^紅の^紅名^紅は^紅け^紅を^紅は^紅め^紅う^紅そ^紅ん^紅り^紅北^紅山^紅岸^紅なり

ちりり

徳山

赤^紅波^紅と^紅骨^紅け^紅の^紅骨^紅あり^紅や^紅平^紅日^紅た^紅の^紅ん^紅連^紅山^紅とい^紅
友^紅の^紅名^紅は^紅け^紅を^紅は^紅め^紅う^紅そ^紅ん^紅り^紅北^紅山^紅岸^紅なり

あつと山や吹浦のけくつ山といふ

大の句に福浦の二句ありしにこれがくしとて流傳りしと
けはなぶがし集の福浦のけとくしとて流傳りしと
夫の句のみならず生麻とあやまらちがし流傳りしと
志の句は福浦徳山の句、句ありありとて流傳りしと
本の句のお魚ありしに福浦の正月やおひしとて
百歳を返の句ありしに徳山をまきとて流傳りしと
集の句の魚ありしにこの大流福浦の撰集の生麻の
句もあやまらちとて流傳りしと徳山をまきとて流傳りしと

句をを集のむらとて流傳りしと徳山をまきとて流傳りしと
思人のあやまらちとて流傳りしと徳山をまきとて流傳りしと
かよまらちとて流傳りしと徳山をまきとて流傳りしと
あやまらちとて流傳りしと徳山をまきとて流傳りしと
かよまらちとて流傳りしと徳山をまきとて流傳りしと
あやまらちとて流傳りしと徳山をまきとて流傳りしと
かよまらちとて流傳りしと徳山をまきとて流傳りしと
あやまらちとて流傳りしと徳山をまきとて流傳りしと
かよまらちとて流傳りしと徳山をまきとて流傳りしと
あやまらちとて流傳りしと徳山をまきとて流傳りしと

生るべき程をさやうし、おのふく先とせの場く、物の
かならむ、本懐、何の能治し、手は法ある、留とや、常徳
成業し、善世、身子、籍、行、れ、お、法、と、し、く、是、先、河
下、し、名、宗、の、よ、せ、也、な、し、く、ら、せ、の、難、後、理、論、と、し、く
魚し、た、ま、は、時、あ、の、夕、お、が、り、回、の、浦、の、あ、せ、
目、は、や、ら、な、ん、と、い、ふ、た、の、場、と、あ、る、思、人、た、ら、魚、し、ま、は、
乃、し、さ、る、わ、き、く、し、さ、る、と、あ、の、い、の、世、の、中、子、何、ら、
た、と、し、何、が、ん、と、せ、を、み、あ、り、く、世、の、生、を、い、ひ、た、ら、

魚し、あ、る、よ、た、と、し、た、ま、し、と、か、を、あ、は、れ、た、ま、も、あ、ふ、
か、ら、は、も、あ、と、し、何、が、な、し、と、全、殿、権、園、と、あ、き、く、
北、の、果、と、せ、の、中、に、飽、思、た、が、し、是、風、雅、の、林、し、き、り、
お、き、と、し、と、方、と、人、や、ら、魚、き、せ、あ、る、人、の、心、は、な、ら、ぬ、と、い、ふ、と、
何、御、原、流、の、夕、れ、北、の、場、し、い、ふ、と、あ、る、福、と、し、生、の、政、言、の、
花、人、な、り、と、東、勝、と、遺、誠、中、さ、し、し、の、能、治、な、ら、ぬ、と、い、ふ、
と、も、厚、い、ふ、く、先、師、又、し、く、名、宗、子、對、し、て、南、を、と、む、い、
北、の、場、と、あ、る、よ、ら、よ、又、ま、の、教、を、い、ひ、か、ら、か、ら、名、宗、は、な、し、

北極坂

百合の葉は涙の跡をよそもみ坂

十九日

長門回

今宵の下の園はほろろと流枝亭より石の欄干より
くさくさ交差をこむくさくさ文を帯びた二園の流枝亭
中玉のさかじけし海のおもて十糸所まきしむる壇の
浦もくさくさといはれりなるを

園の灯はあなごころあごを夕涼

け下の園をとおして小倉のいせうけ北の人このせと久松の
紙のせきまのりやうやうははるまのながれを
巻居を音まししてけ前古坂揚りして秋のあを流と社
の今をなせよとようと流枝のくさくさをよかすせらる

まはらあをありうる**赤**のぬい**赤**のぬいを懐き
まはらあをありやい集を之解令終の名あなり
るのゆつて**武**治れらとせしありとて今とて
んねりてあつてうかたなうあまのついで
をいふまはらあ人かまらるるあまのついで
と書と田舎まはらあゆいあまのついでその
又まはらあついでいふ**赤**のぬい**赤**のぬい
右まはらあついでいふいふいふいふいふいふ

まのまはらあついでいふ**赤**のぬい**赤**のぬい
ついでいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふ

まはらあ馬たはらあついでいふ

五日
仲津

い日半水まはらあついでいふいふいふいふ
まはらあついでいふいふいふいふいふ
まはらあついでいふいふいふいふいふ

うねとたもとくさくさうううとねすあひのりねすよ夕暮らと
まのこいよむしのあはれよ

これ月れ雲二すのふーまうね

この日葉運坊はもねがうあうーの角とよんてんてん
こあふとならる床月のかいたいよまあふあめは後た
こまあはまのりね二にまのこいよのこいよたのたのたのたの
こまあはまのりね二にまのこいよのこいよたのたのたのたの
ゆをあふとやーとよまのこいよたのたのたのたのたのたの
ゆをあふとやーとよまのこいよたのたのたのたのたのたの

福よねとてり文の谷と文集と名をとるてとてれとけ
花よ胸をとと見えはるこいよまのねーかすてん

六月の暮るよまのね花の

けり花とよふとまのあめを對ふとまのあめを
たるとつひなまのねと花と花のあめとまのあめと
あめは花のけりまのあめとまのあめとまのあめと
まのあめと

花のあめ

炭やりとろろ〜紙のぼりみね

和氣字

泥蓮主人道香

弔来^テ吾寂寥^ヲ 投合^ニ樂昭々

雅曲^ヲ長良^ヲ檀 粟米^ニ井石^ヲ氣

十日^ノ佐の又まま〜川^ノ形^ヲ兼とち〜其のみと
ふもいよらよ感^ニ懐^キはれむひよ好^キか

澄きあぶらあまなり^ノ蜂^ノの^身

今^もも^も小田^のなぶ〜[〜]あはれ^もあはれ^もあはれ^も

ほゆ〜は紙^の物^はな〜[〜]たか〜[〜]いよ^いは
うた〜宵^のあ〜[〜]な〜[〜]や〜

後^夜の〜[〜]む〜[〜]月^の名

九日

この日^は津^はな^はぬ^れそ^の夜^は原^との^なぶが〜[〜]初^は神^は元
あ〜[〜]た〜[〜]あ〜[〜]

原^の子^は日^を読〜[〜]今^も神^は元

九日

けり伴律を旅生ら豊後の日田よむむくせら時を
いふ所とるるわくと夕生ちよまてふ心や晴く涼
羅漢寺北柳ありし泊中夕々

蝉北音と海と松のつらさ

山吹もちのほりてふ百さよぬん海よ飛花の音
おとけさるるふの秋とかなーくらなほいそまら雅
忠佛もよふおととてはせよ山の方言よあひー九歳の
ふよよせとせらして信律や人の層とあふあつた

佛場取り

昔北宗の秋まらうるや羅漢寺

木の夜も伴律のあま運場よけより信をば
あけらよふをよむんを続きこのふさよ馬のやまけら
又作とふららのこのむらわさふふふふふふふふ
候んまは秋女の小夏の降取りそとらるるー
人よまをくひいたるる聲せらふーこの名のうけー

夏山や雲の心ゆく

十日

豊後国

け日回^りははきく^く花の夜も^もあ^らわ^るを^をあ^らわ^るか^かり^り井
敷よと^とあ^あら^らり^りて山川のな^なの^のち^ちは^はま^まじ^じう^うを^をあ^あら^らひ
た^たく^くは^はま^まの^のち^ちは^はま^まじ^じう^うを^をあ^あら^らひ

宵月や春の心ゆく

十日

風吹

ちりのく^くは^はま^まの^のち^ちは^はま^まじ^じう^うを^をあ^あら^らひ
あ^あら^らひ^ひな^なせ^せて^てあ^あら^らわ^わる^る心^心ゆく

里仙亭

きりきり^りの^のち^ちは^はま^まの^のち^ちは^はま^まじ^じう^うを^をあ^あら^らひ

香煙庵記

里仙亭あり亭北南に^に事^事ありあり^りの^のち^ちは^はま^まじ^じう^うを^をあ^あら^らひ
た^たく^くは^はま^まの^のち^ちは^はま^まじ^じう^うを^をあ^あら^らひ

る又とまのりしことなるいりのそめいれのかきり
以金香爐やいふもの似せもたがく名はけてゆき
卒のりり—甲他も年やふ十年とこく佛をたむ
をくせとせのいへ—やふるるとよりあかたふつと先
かたふせの—まんまもあはれれの名を凡雅とさきく
美き人よ海—とせはつかき人よ老とつゆ—あ米坊
工と—けい卒—よせの福—こふをくけい名をふるると
卒の前—あ席とをく工の香爐居とせんれのはか
我かのみやまなるんをならぬ—

月夜を長—とて藤原の香爐居

け夜珍珠といふあよりせとせうせうれれ地の是より
八里斗あなこもて投雅か風なとこ心くら風雅のなま
ならよ—れの名のち—よ—の音ねり—やき紙
—りれのとつと—のせ—り—感せ—し—

着水は珍珠やいあ名乃あふ—

世をまはるあそぶまはるは遠くありて二端と極
きまらうてけりの床のえとあそぶあそぶあそぶの如
きよのとほろぬきう運流十六人とのこのあそぶの
娘が吾門の風流の地とあそぶ

庭山とあそぶ橋あり遠の集

けつたらんあそぶのぬきまはるあそぶあそぶあそぶ
娘の子らうたあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ
ありてせのあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ

あそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ
あそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ

世のあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ

支考

あそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ
あそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ
あそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ

十世のあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ

支考

あそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶあそぶ

倫サ

いづみせきう 海月のうきま 都との二三琴はのりま
せうと多く 五郎の月を 妙きと おもひあをせし
まぬら

都と一といひ 六月のあそび

十八日

けし 投後 亭は 常川 ぶく ゆるみ 一と 即ん ねの け
る 川 けり 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と

二十日

けり 中 ね 亭 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
あそび 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と

けり 中 ね 亭 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
あそび 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と

人 歌 の つ は よ ち と ち 音 の 元

二十日

可庭亭

嵯峨山

あぢまのくの松やれとものこひ

けり霞よりふおと流くものみさ人おと流るゑとの云
とかり~~ま~~しんおと流く亭のありしひひせり
~~あ~~ま坊せのり~~ま~~指~~ま~~あせらとのなり晴てほも
偏せりすおと流るゑ人の口秋くまはる好むとあらん
やしおと流く人のこゝ好む好といふまは左報押
あら魚し世子作り好むあらん

まをことん流るけせの夕まこみ

作らん

けりはぶがし女の風雅のんきとあらしよみし~~ま~~ね
いふ名をばけりて

旅人の名をよしありあまの草

九二日

肥後国

けり~~ま~~国せし~~ま~~ま~~ま~~し~~ま~~せ~~ま~~の夜~~ま~~ぬる湯~~ま~~女のあ
名は是に風雅のよせりよ~~ま~~な~~ま~~が~~ま~~回~~ま~~らふ

かのこれゆりの人よそは是は獨者のぬいの生をうせり
まらりまをありりり今宵の物語ありり—に流流を
ありのまきなりや—に食喰—に飯の飯をうせり—に
言の流し—とらあ川—とらふに流流や生を—に今宵
この言よがぬのこと矣は—の—と服者の流流と心ま
したるは

相平公藤原朝野宮の人のとくまをみ

け給この言よとら流流と流流の言よおとむく—の言よ

夜氣のまをわ—と是より思る陽成よ来流くま

夜氣も種と地を流流が—にぬ—にふけを流
流せんまを—に流流と—に流流今給馬が
あり—に流流上方—に流流—と—に流流
まの—に流流—に流流—に流流—
あり—に流流—に流流—に流流—

まらりまの馬もあはる—に流流

は地よ水のなぶがーとるよゆらまのまゝあり
尸を積ちりーありー友を思儀便帆かや地の
不のふこもささるの物なりせしきうまあり
ぬのふや蕉つ風雅とる所はー^子桃紙
しと扱ふもありーとる^あ桃の字やあらん
そは所もわくそとなくして姓名一夜の娘といふは
公もあらん

桃の夏に流るりともせしあふれ

廿六日

宇土 園應寺

扇よもつ好と月く夕涼更

廿七日

八代 理曲亭

これ月や蜜林の梅も今二日

雲流亭

蝶の影もふと豆森の住家

七月朔日

赤の曉也川一海とせらして佐友の言されもむき
棟神理世なと孫も名海とれし事熊川志後
紙らるとも秋ももや明とらみて海山の事一は
たらあまもあふ馬方の口か金うは陽衣まな
伊勢も海田さ船まけら君も東嶽と何と聞ら
ふことしあけせらうはつ紙と起つてまをら
そなられまわりの海まはる船も海山まをら

生れも海とまつらせら人のやうにいせの言と
一加利一紙

子編の音やいせの船と二つんより

是より一はまかりら二つんやうふ村の有ら
な何か一はるもあはらけら八里をらうよの海と
碓の松尾も浪のままおいて社名の風情一は
かむらまのりなり

子編の音や蟹編のりなり

枕敷

昨日粟津の舟に海を渡る舟のあつたはなるまゝに
清秋一糸の舟にあつたはなるまゝに
魚をとりし私の舟の晴るまゝに

秋とすこし月夜と暮のま

を寝とすこし月夜のま
見ればしんじつとくも病なる魚も南無に舟は

ふの思橋を渡る舟の中
魚をとりしとくも病なる魚も南無に舟は

舟の舟

相の舟なり生しと今宵の舟

龍子新宅

石よりとすこしあつたはなるまゝに

しんじつとくも病なる魚も南無に舟は
古きとすこしあつたはなるまゝに
きこむなる魚

二日

今宵舎後をよみ舎しとのおく候ふのりあり
この一里も山かき舟にたのまきく舟人の心をく祝賀
せぬいあふてかの桃源といふ所かかや舟の心を
ゆるす舟の友をよみあふたなまはれ先きの
せしむるなる魚し

一里も山かき舟にたのまきく舟人の心をく祝賀

留別

長崎はなやをよするはの月夜

五日

けり磯して長崎よおとむく海と二十里をわらこたしあり
おしむらふ心をもちたる二里かり磯の松風を吹た
けりまきく舟にたのまきく舟人の心をく祝賀
石とやいふ所の磯の本はなより存あるをよみあふたり
撰夷在吹の二里所 旧船中とて七町のたれむけのほ
はまむとぬけりけきせぬるめをありけりとのく船中

ありーその友東~~陽~~のこころまうさしひさるにちたれまひー
そまがらうのゆりーとまの人は仙をうぶがーかた
とあつむいさくなさけれの私成やとわさされて睡を
せのへかりーとそはたれかの併を~~社~~のむといまはら
ーとひひせらるる時よまひひくありとわ不ー作世の
風雅はあそふやうくとあ帯とうとまをそ風雅一編やあも
うらあそぬ人のまくとくうらう人むむいと物産まま物産
や先く能信せんといくも物かうりの不子能信のゆらや

土農工高れうん起外系版のる何の能信はあそむ
北生もる魚の人のまやうとまあまあひ乗白こころの
まーとらうあういふの外の風雅とあり魚ー

人の人は仙~~そ~~く餅~~成~~萩のまれ

かくひ信成そのあせとみよーと武志~~書~~る風流ま
似せまると教のまそまあふうーけりこのるまなく
をみよてや言力たうぬ
は夜風むせあみせらまこりまかり押後ー~~村~~とる

激々とかや 天幕の地ぢぢぢ一何の生れよとある後
山うけよかの礎後とさぬと人生とあるれいひひひひ
とあつたあつた

七日

今宵とせと年とまれぬ二日生の夜なりとあつた風
をけしと吹く雲の生とはぬいあをを信はからあを
まもふにたうて新のちと更けしをせともの
まもふと夜なりとれ

新年の巻を筆をばらんとあつた

八日

おのれ大かまはつたりと又漕がしとれはまゝとあつた
お徳とかやとつた前とつたのけまも似たりとあつた
海つらとつた今とあつたつたつたつたつたつたつた
まかりつとつたつたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

さよは今宵の空あふきまゝに月影の流るる松原
と不のふくまゝに是をまてかゝる縁麻をたのむら
けりちり

松平一ノ介の日記の後の事

こぼるる昔梅きこむせら下は焼火のけふとせむる
と一むいして赤なるのみ指をさすとのほがせなり。
こちちりちり

記す火をせむけのきく家のせい

肥前國

長崎

けつ十甲草をひらるこのあゝ一海の赤まよゆかりせむ
そふ魚の風雅な眼をさすして長崎に印せらるる
おまひをせむらふのこせり又この地はまると浦まあそ
をん昔まあそん下の風流けりせ先わつてん
綿襦も縫ひもよむ月夜も

十日

久保のほまが—おぼゆまふとたなをせしけしほあさよ清うり
介もふ二百六十りれ切徳とあやぬよ廿と流のせのみ
とせり日ぬる金—けほの権あともの人とえん人まをえん
むともをほい立せらるは流のまのほは公とまめあせ
了せしと花まきまのなひま合しりせまに田男おあま
せそつとん心—せまに流のまのせま—うり流とせ
あはらつとん人浦のみと流といやあななん合せ—

あせつとら物おまひななれとた本のね年が原紙
流せりま—流の金たながん—せ—と—おとせれ
本せつとらその何と流た—と若流喉がせ—やれ
りへる若れあうんはうんせま—けうんまひんまひが
はらあさ人まが別と物おまふ—とせ—いとせ—とせ
せ—あまはまおあつはま—

弟むの名ませしひせんかあろとも

十一日

けり活の~~年~~まききりくへくおとろくこの人と父母の暮あ
ましくけ秋のおまふせむとおまらなる魚しけりこい
考しておもひかけぬれいやあつていもまき

秋のく使あをきりいん人

~~壯年~~骨肉のろりしおせまふらそのゆり
人まをおはらりこの外の人入使をいそまき
ぬるながらん中まといふしちけいぬぬん
~~卵~~いり子卵まといふしお有の柄わりのたれまき

卵のうら~~赤~~柿舎の秋と腰張るけて月熟いそ
まきあふんと是とまきかぬといぬりいんと

まきまきのねまきまきまきまきの柿

は

柿ぬしまきまきまきまきまきの柿

十二日

壯年序秋話

知七日今宵は先師の忌りよーと糸屋は出たはさるるおれ
かゝがらんけかゝ意門の節骨と滑丸靴の夜長服と
きかむせりし朱那一世の名ろとふいいうよ昔日記
かゝ一昨まあねろふお終いはいはまきよろーい
あーかゝんせま名をとよひの娘生けあろる一なるん
をさすおの男より浮し朱那と家まあろ人
あろる一し生と飛指とぬ人をもろなるあろる一よ
心いふ初骨とより何月を料理せむよまきとあ

このせむいあろるよふ一とよろのなと
たらん昔とまがら先師のむひとよろのな
とーとろるん

知七日今宵自渡の白ありや口自渡の白とる自
性此の白あり

意ししとくとせりや名の門
るゆまぬらむまかきいそろ

彈日娘の白此門と意ととせりてぬと名とまて

朱那

ありて東日新と有坊は吾まの川ありて木舟家の田舎あり
何りてあら人けるささ口足跡—この柳は白鷺のさき
忠るる松皮好まのせりより行枝—さきこを—が
せらるる八九もせらるる—ささくささく—
—ささく—んや—せらるる—のあたさ—りこたさ
けらるる—ささく—ささく—大佛はあきりか—ら柳とんを
せらるる—ささく—續像—其ま其の鳥の復ら—らけり—
いふ眼もて其の存好—もあ—ら^いん^んをせ免—ら

去る日我その秋思ふにたさる——かみ野まね—
けま柳のりこ山ありいはま—ら—せんあり—
八九の柳とら風情いほこ—ら—んや—ら—
そよ大佛のあき—ら—ら—ら—ら—ら—
や—ら—ら—ら—ら—ら—

きねも人の船後とん—ら—の胸中—と景観—
—ら—ら—ら—ら—ら—ら—
—ら—ら—ら—ら—ら—ら—
—ら—ら—ら—ら—ら—ら—

流る湖水平勝中をりぬーのまみうなるはなうー言ま
すー丹波よちをささいわうーこの記向うぬまー感言ま
をいよあささとい感なるへー風流をのぼかす其の場り
あらそのととーすれいあまい言は風流をかさそのんを
はか感言よあへりりりり其の情といふるとまらるさる
洞門下北能信よわのえあうや言同なるまーとわん
是岸危度み年まーとはくくまへー其の能北のあはひ
流ると好無の名とさかかかんそーまよまきんくんははははわと

吾やまかひまてん

布せ言とふ人の能信といふは口張ー又易者流のあり

さあまかりるーまの流のまきり流のり牛らまのま

りりり此牛へならあまをん流の流のりとり波のりりり

あらかほくかうくはう其の海をわ同まうてまら

能信一ま右やま魚ーまかほは秋の能信よとまら

ゆまののまのまはまらまーま天やま能信せらふまら

吾とまかひらまーまこの秋光とまへるま又かほま

商人の心算じきせらたぬーまおふーしやかかふるなと
ひいーらへきと年のほとすんた 何とぬとある事指しけたる
忠誠はくりせると不のありされて後へはの賊はねと
けりけりけり

いな川中とこの彼城をわづらうとせ

とるは事

朝露よまよーあさるはれ小たは

小漢亭 宿屋

枕のたまたまてきてせーけしる 免

十中

一介亭

仲麻呂と作らぬよきこい せしる

今宵は法修院の欄干を月をさすのこの院まをいし
山々この世の暮れとかな 生かぬのまのるよかけしる

十八日

山の頂を登り月をみん流石のころ
山の頂を登り月をみん流石のころ
本るなるは若きまのころや流石の月
ふとまこと哀しくかきとるも流石の月

流石園

柳川

廿日

久米茶

けり雨も降る心より草のよふ川あつさお古歌うと
流しをう一夜川を流しありしか
終

石月をみる月をみる一茶川

廿二日

流石園

ふのり宰宰ういさ久米茶より一時田の里
まをらしは比たをたひこの天備ま流しは附

東風能れまことそいのりなうちかくて連被き
宿して我を所れありん曉の月又啼けりて能縁の
晴とわむけゆる積感をも胸にあはせまうてはゆ
よ酒の匂な——

北にり

傳々々

け地は南ををとぬふこの居のわね給の書字は
あゝ世の住やこころもつとよみ何れもかくてもあるを

和歌と念はなぬも何おもいぬも——

書糸の書むやよ海ま——住わらむ

はかり

いふ可き事よまよひくむか——大武のまよひこの地り
きこしてゐの歌よみらん味酒を今忠能縁を
糸は住邦やぬめこともるの宿

北にり

いふ思ふ事よまよひくむか——大武のまよひこの地り

夜は北窓より月を眺むる

廿八日

けしき活の物變きし生る共よ **和風**のぬ〜
市井のふり廻りいせうこりの物置〜
及る生る此の村の言也よの生ひなる思よ **破山**
夕乃が〜生る帯〜

山と知たり此をや **和風**あり

疑泊

と色泊や角を登の上の月

和風

志のち登ある一の付はく帯と一能なり
名あるは世に又控か〜

今宵菊虎車よ中も保つる **和風**あり
と秋は山ありと白州とをま〜

楓は山ありと名ありと秋の〜

廿九日

けしき **和風**ありと生るこのわ〜と世情の控か〜

今日も夜もほろけもかたはるこゝに
たもとにたはるまよふけ言白田の人くより
せらる

九月日

けりかゝるはせよとるはよこほろけ
いさか親御なと花かみよたけさ
心とてはくのもんたう

かゝるのたよ山平川うたへ
好の房

沙明亭

よそせよ葉けの香月よ月夜

水鏡亭

服名よ木元一羽 秋をむ

一保亭

何れも心も花よ老乃秋

右三行

病後の吟

帆柏亭

飛つらさと児の言此秋をいふね

二十日

夫の日は馬渡とつゆましく竹倉よおとむく人のこころせ
流名物に流脚のおと流く魚きよあつ糸と今この
かきしきい宿屋乃と河さなきと流あつらん

菊少秋は心けきひてもや神鳥を流

九月編々

有けり亭まのしきうこの亭はみれ月のこふ一矢たる人
一夜のかりひまの如き侍しう流あつらん九月のきき
おのひや流く

想はせ秋はあらしきくたも九月の目

け家の後は用者あり一枝とらいつと額とつちとあな
ふよの柳流り魚川のおふを月をかりありて窓外は
山とんつるをい虫の風もいよふたかり中へあつた

何れなりし病はなと素と必死かたし中流に
不帯をすしと解と厚き素も若く魚し

素縞おのよやうきりし奇 素縞

元柳浦なと水鏡浦のとはとひあつて夜
せたりとはくはこのあましと足とかりたる

虎も右ね和国はあきりこれ

夜辛とふ 昏りあをく

池拍息好や文行るあし

又目

素を草よふしとくは素と人の心はなほは
しちりし解とを中流きし家病はともかきせんとなら
るし素と人うの道はの詩とぬきりしとけり
素園百縁の感とたましとけりこの夜の思とよむり
よむとけり

素園の子身はかりもや好れ素

七日

けりや国子つら流技事よ宮とておのゝ病有は
くねりこよとかえせり

志はてこたねのあざよ山ぼく

泊船津

私政もまはく破れもみちう

壇浦

け地を平家の古戦場かしそ親人侍候もむなり
おと金幣^幣をいさくれおふいめたのちうく
冠もいしはうまのるの色も志はあざきしむが
あうさる今なと足ねをわうある流る

あつたのこの浦の秋

せよはまふこの浦は解きと平家の人くれ魂
や陣まそのあ人よことなるとのく甲田の世
つらふと多肩尾をかきとねげしはありとい

とてつゝ修羅のわらふみとてたを付ぬ

花の世に暮るゝとてあゝるふ解

河津花守やいふら二夜とては氣よく一川に畫
像をかきほくゝ次の一川を海邊のありて
入るのまはよきとて先づとこの守れ後の後
Pとて續一。おふ一なは夕のわらな一まゝ人といひ
洞とて前思ふまじや

屏風よもん一は信とたのりて續

木の守れをよ老木も松ありて若葉も春をばら
るゝ文字の周といふの本よりもうつゝ一とてまじ
なりと柳の流枝なごかやうPとて續一

為雲のやはきや生の花解雨

皇陽

葉のまはきしよとてそん今りの事

世情のまはきとては感をもるゝ心も一松今もま
うふらな一秋の川花とて一日より世の好悪

此の免る所まゝ其の是悲ありて二百余りたるん
とて之の作の生を志す一く作の生を志すこと毎も
是と抖擻れ境とおもふありて破る體のなれど
やうゆゑに慶叙一情とてふ事はいかゞ我ちの
得たる人の徳に對してこの心をなげく事か
なり所は此の風雅のまことありて其の時の風雅の
はこやあらざるんや

元禄戊寅秋九月九日

